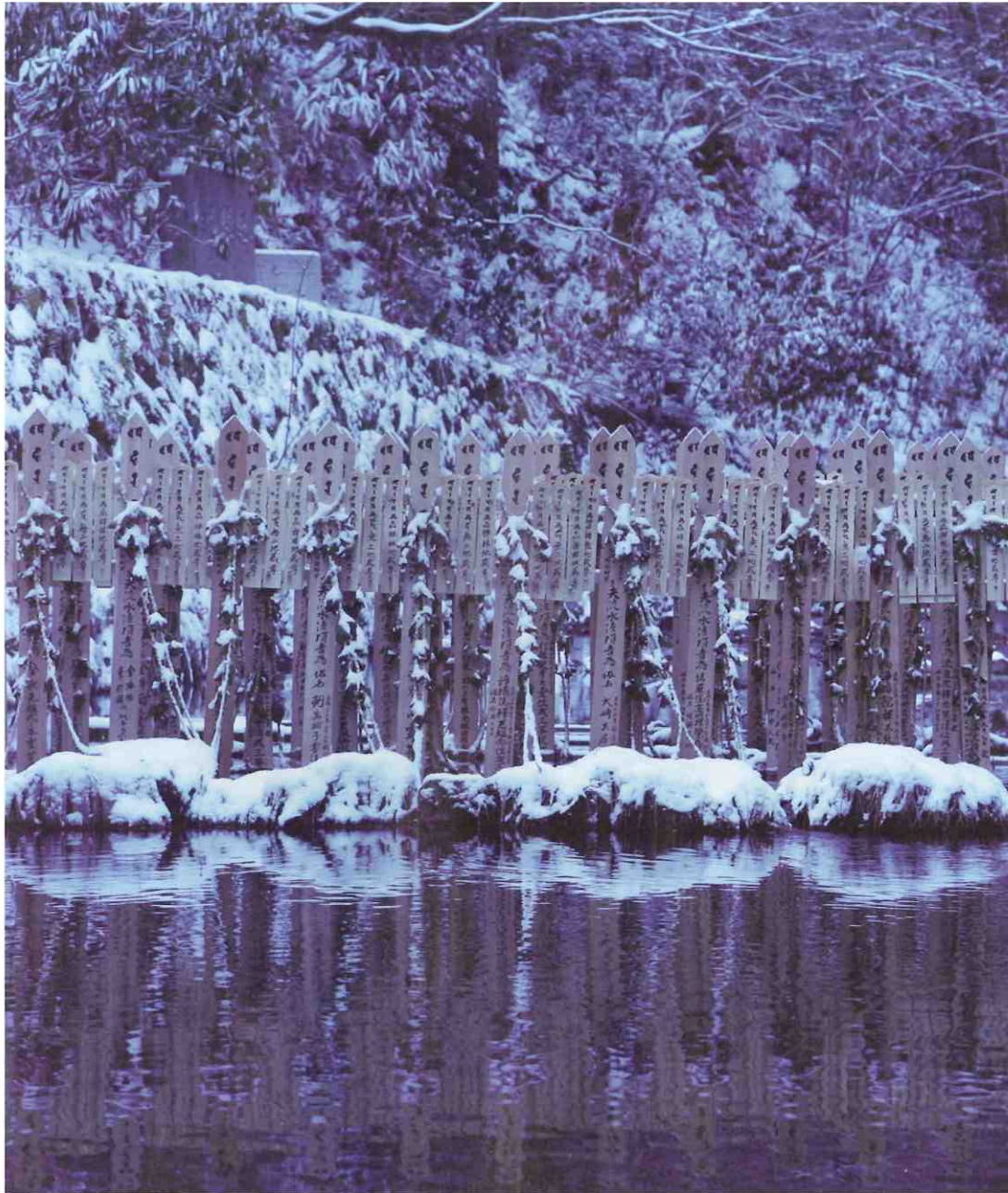


霊宝館だより

題字・畚野光義師



奥之院玉川で供養される流灌頂（ながれかんじょう）の塔婆

霊宝館だより 第109号

平成26年2月24日発行
和歌山県伊都郡高野町高野山306
公益財団法人高野山文化財保存会
高野山霊宝館
電話0736-56-2029
URL <http://www.reihokan.or.jp>

利用案内

開館時間
 11月1日～4月30日 8時30分～17時00分
 5月1日～10月31日 8時30分～17時30分

休館日 年末年始のみ

拝観料 大人 600円
 高・大学生 350円
 小・中学生 250円
 高野町に住居票がある方、高野町内の学校に在籍する学生の方は入館無料です。

専用駐車場あり

冬期平常展「密教の美術」 開催中

第8回もみじ祭フォトコンテスト 「高野山の見どころ」 全応募作品展示中

いずれも4月20日(日)まで

第109号 目次

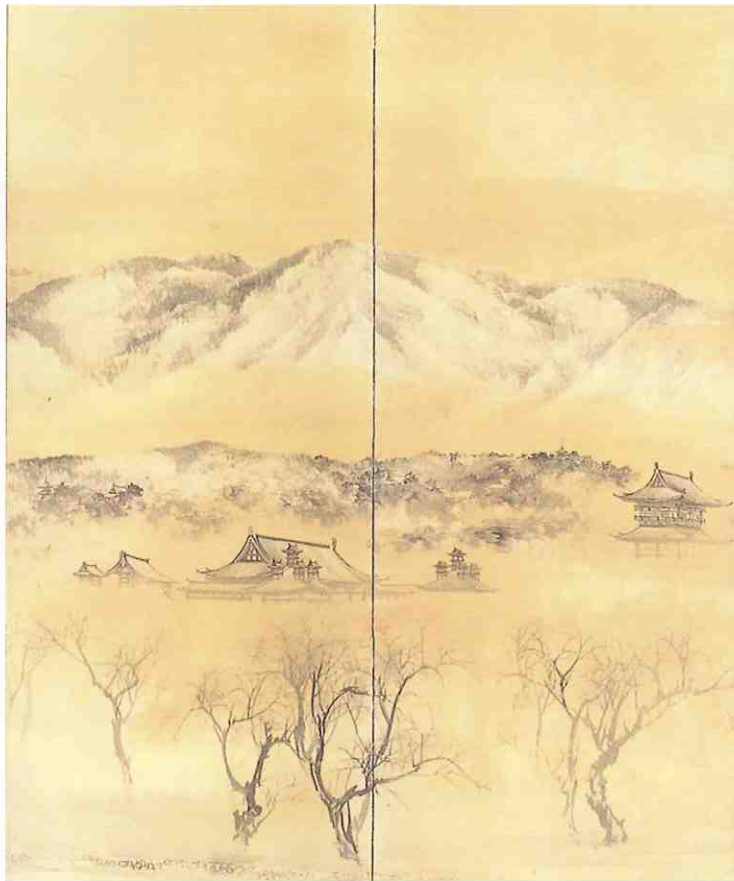
冬期平常展のご案内	2
収蔵品の紹介83	3
第8回もみじ祭フォトコンテスト 入選作品発表	4～6
高野山の古建築 第十三回	7
高野山文化財保存会の 文化財保護への取り組み	8
高野山霊宝館からのお知らせ	9
高野山の考古学(一)	10～11
霊宝館の庭園	12

毎月21日(弘法大師の日) ご来館の方にプレゼントあり！ ホームページ割引券もご利用ください

冬期平常展開催中 4月20日(日)まで



將軍地藏菩薩像



京都東山全景図(部分)

今回の平常展は、高野山に伝わる神道関係の遺品を中心に展示いたします。普段展示することの少ない、貴重な宝物の数々をぜひご覧ください。
また、新館第二室では、岸派の絵画作品をご紹介します。
さらに平成二十六年の干支・午にちなみまして、馬が描かれた仏画の小特集を本館紫雲殿にて開催しています。
冬の高野山にも皆様ぜひお越しください。

主な出陳品

彫刻

- 雨宝童子立像 金剛峯寺
- 厨子入三宝荒神立像(木食真人作) 金剛峯寺

絵画

- 京都東山全景図(岸竹堂筆) 金剛峯寺
- 群鶴舞図(岸連山筆) 金剛峯寺
- 虎図(岸良筆) 遍照光院
- 子島荒神像 宝城院
- 將軍地藏菩薩像(高屋肖哲筆) 常喜院
- 仏涅槃図 竜光院

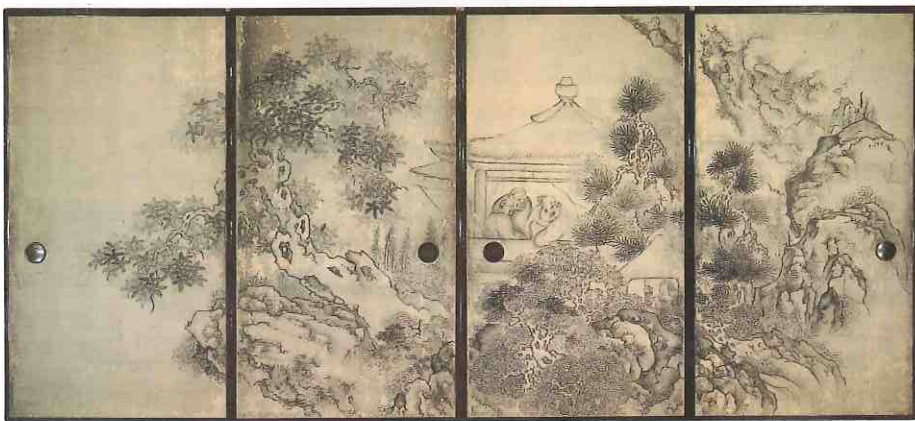
工芸

- 弓・弓台・矢・宝剣(巡寺八幡御神体) 有志八幡講
- 大日如来像懸仏 金剛峯寺
- 刀(御社二之宮奉納) 金剛峯寺

書跡

- 国宝 又統宝簡集39紙背 高野山宝印(高野山) 金剛峯寺
- 国宝 又統宝簡集14紙背 御影堂牛玉宝印(東寺) 金剛峯寺
- 北条政子自筆書状 金剛三昧院

収蔵品の紹介 83



池大雅筆 山水人物図襖のうち山亭雅会図（国宝）

国宝附属 虎図 とら 岸良筆 がんにりょう

江戸時代（二九世紀）

遍照光院蔵 紙本墨画淡彩 四面

襖全体…各縦168・0 cm 横91・5 cm

本 紙…各縦132・1 cm 横61・0 cm

江戸時代の文人画家で、書家としても知られる池大雅（一七二三～一七七六年）の代表作といわれる、国宝・山水人物図襖。現在は霊宝館に収蔵され、数年に一度のペースで公開されていますが、元々は遍照光院の一室に使用されていた襖で、裏面にも絵が描かれています。今回

ご紹介するのはこの、裏面に描かれた虎の絵です。池大雅の絵が、襖の全面を使った大作なのにに対し、こちらは押絵貼といって、襖に比べると一回り小さな紙に描かれた絵を貼り付けた形式となっています。

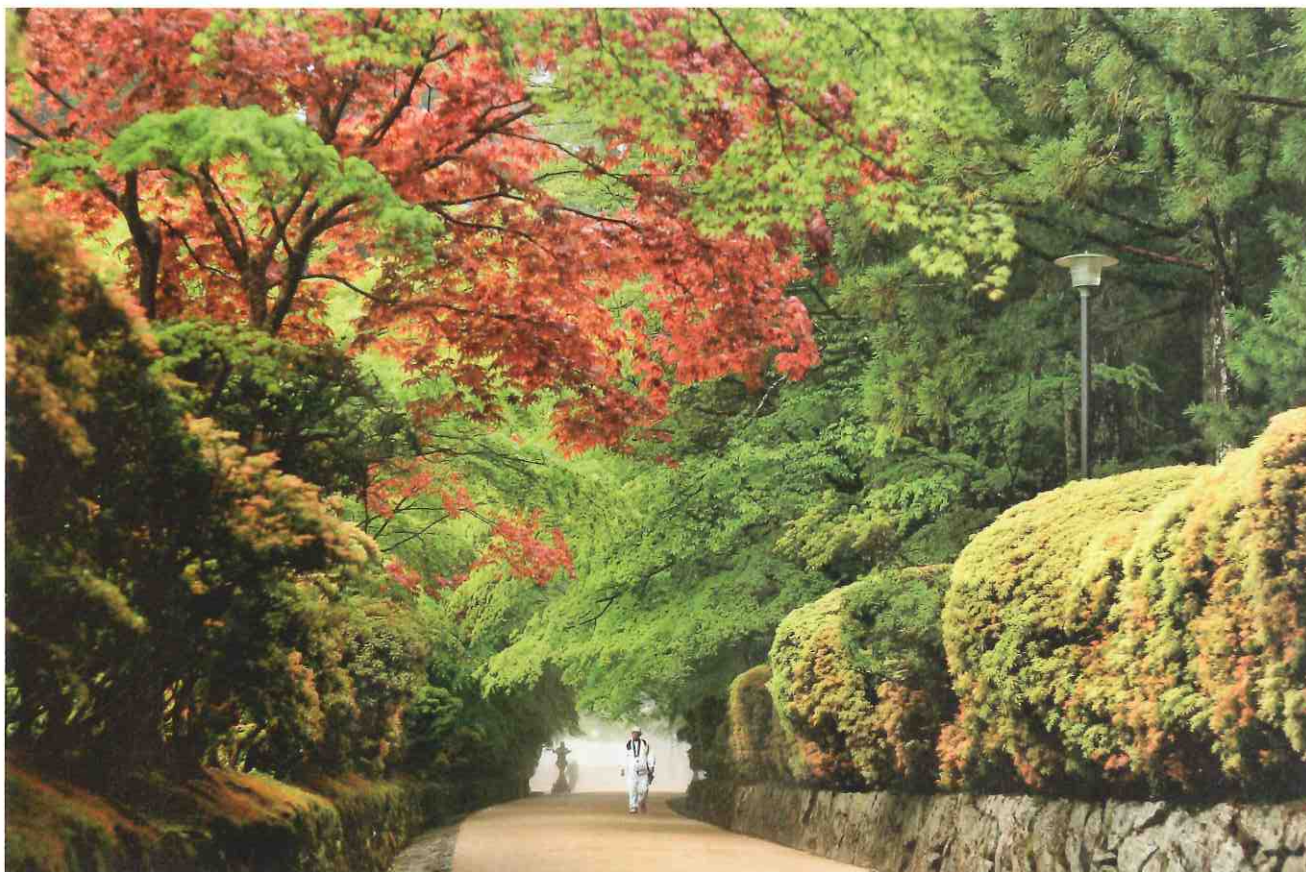
この絵の作者は岸良（一七九八～一八五二年）という人物で、岸駒（一七五六？～一八三九年）を祖とし、虎の絵を得意とした岸派の画家です。高野山には岸派の絵がいくつかの寺院に伝わっており、同じく岸良によって描かれた襖絵が西門院にも現存します。

本図は池大雅の襖絵十面のうち、「山亭雅会図」四面の裏に描かれており、岩に乗ったり、水を飲んだり、さまざまな姿の虎を各面一頭ずつ描いています。耳のない、少々ユーモラスな姿は、この時代の日本では生きた虎を見るのは難しく、毛皮や先人の絵を手本として描いたためです。とはいえ、光の当たり具合によって体色の濃淡を変えたり、岩の質感表現など、技量の高さもうかがえます。表面があまりにも有名なため、こちらの作品の展示は非常に稀で、一般的にはほとんど知られていません。

(F)

第8回もみじ祭 フォトコンテスト入選作品発表

(受賞者敬称略・順不同)



グランプリ賞 木下 滋

撮影場所：蛇腹道

雨上がりの5月、春紅葉のもみじと、覆い被さるほどの新緑が見事な蛇腹道を訪ねてみました。参拝や観光に来られた方々と言葉を交しながらの堂塔巡り、とても楽しい1日を過ごすことができました。

第八回もみじ祭フォトコンテストは、「高野山の見どころ」というテーマで募集し、多数のご応募をいただきました。応募者の高野山への思いが伝わってくる迫力のある写真ばかりでした。

その中から七作品が、優秀作品として選ばれましたので、結果発表と併せてご紹介させていただきます。

応募作品は、四月二十日(日)まで霊宝館で展示していますので、是非ご覧ください。

たくさんのご応募、ありがとうございました。

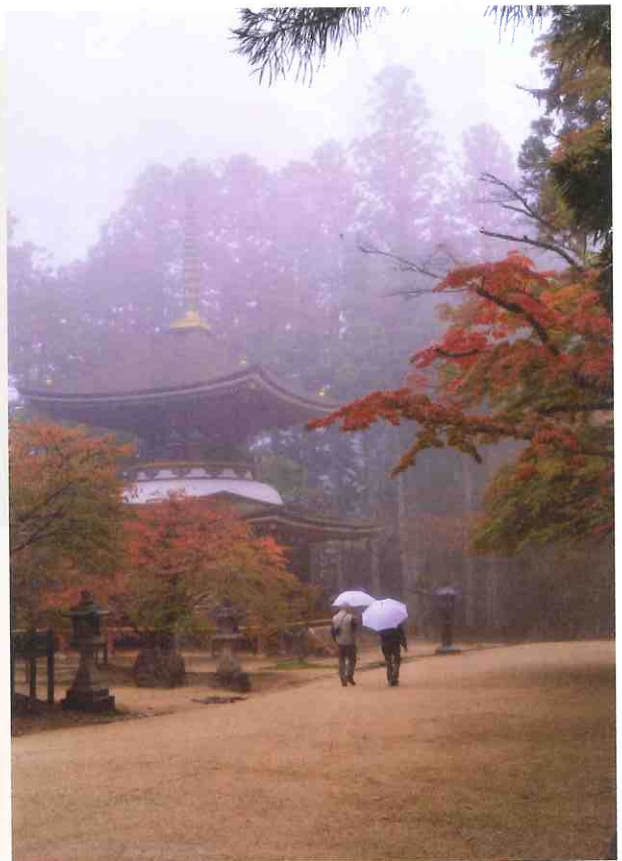


銀賞 吉野 菊夫

撮影場所：大伽藍

題「錦秋のお練法会」

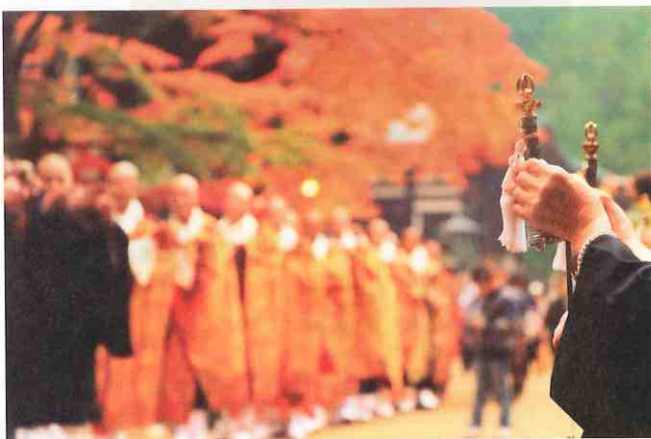
見頃の紅葉を背景に厳粛なお練法会をはじめて見る事ができた。



金賞 井戸 陸雄

撮影場所：大伽藍

私は建築家です、高野山で技術を習得し地元を始め近畿一円で社寺、店舗、住宅建築を手がけて来ました。いろいろな景観に出会いましたがその中でも、私の師匠が残した作品で高野山伽藍の東塔は印象深い景観です。霧雨にけむる東塔を白い傘を差した外人さんが、一振り眺め去って行く処を切り取って見ました。私はこの先も四季を通じてこの景観を撮り続け、折りに触れて高野山のスポットを発信して行こうと考えています。



銅賞 田中 嘉宏

撮影場所：伽藍（じゃぼら道）

題「持鈴の音（じれいのね）」

高野山紅葉の絶好の舞台の中で、ご詠歌と持鈴の音が流れる中を、ほら貝を響かせながら、正装の僧侶による、お練り法会が厳かに行われる模様は深く胸に染みる思いがし、ファインダーに写る光景を見ながら、日本のみならず、諸外国にも発信出来ればと思いました。



霊宝館長賞 楠本 武男

撮影場所：根本大塔付近

年間数回高野山にお参り致しますが、春の石楠花も見事ですが、秋、伽藍蛇腹道から根本大塔付近の、急に冷え込んだ天気の良い2,3日後に訪れると目を奪うような紅葉（秋うらら）に毎年あうことができます。標高850mに温もりの高野山を見つけることが出来るでしょう。



入賞 岸 昌生

撮影場所：不動堂前

高野山の紅葉を初めて見に来ました。どの場所も様々な色合いで美しかったのですが、今回撮影に当たり、紅葉と何かしらの建造物を対象にしたいと思い、撮影場所を探しておりました。今まで、鮮やかな赤色が紅葉としては美しいと思っていました。今回、黄色と緑、そしてわずかな朱色が作り出す色合いが不動堂の屋根の灰色と相まって、趣のある写真が撮れたのではないかと考えています。



入賞 高橋 順二

撮影場所：高野山内、壇上伽藍前

題「壇上伽藍からの道」

高野山の桜もそろそろ終わりかけの日、新緑の中壇上伽藍に立ち寄り、伽藍からの好きな蛇腹道への途中、お坊様達がお経を上げられていて、わずかな時間でしたが、静謐の時間を過ごせました。

連載

高野山の古建築

第十三回 県指定文化財 金剛峯寺大主殿(三)

鳴海 祥博



土室の間 部屋の中央に「土室」が造られ弁財天が祀られている。山内の多くの塔頭寺院でも、このような土室の間と土室を見ることができる。



奥書院の土室 大主殿の背面側に接する奥書院にも「土室」が造られている。格式高い書院座敷に「土室」を備えているのは山内でもここだけである。



『紀伊国名所図会』掲載の土室 土室を囲んでくつろぐ姿が生々しく描かれている。



『慕婦絵詞』に描かれた囲炉裏 囲炉裏の上の方に四角な隔壁が描かれている。壁の内側は煤で黒くなっている「土室」を思わせる。炉の周囲に柱はないが、絵巻物に特有な省略法ではないだろうか。

高野山は紀伊山地の標高約八二〇mに位置しています。冬は雪に閉ざされ、そこでの生活は難行苦行そのものだったのではないのでしょうか。そんな高野山で受け継がれてきた越冬のための施設に「土室」があります。総本山金剛峯寺にその土室を見ることができます。

大主殿の南側には金碧障壁画で飾られた五四畳敷の大広間がありますが、その大広間の背後に四〇畳敷の「土室の間」があります。土室の間の中央には四本の柱で囲まれた煙突のような施設があります。大きさは畳一枚ほど、床から一mくらいまでは開放です。その上は天井まで壁で囲まれています。床の位置に炉が切られ、ここで火を焚き暖を取るのです。これが「土室」とよばれる施設です。古い民家などに見られる囲炉裏のように、壁で囲まれた煙道がほかでは見られない特色です。煙道は天井から小屋裏を通って屋根を突き抜け、小さな屋根を掛けた煙出しとなっ

ています。まさに大きな煙突です。そしてこの土室には小さな戸棚と仏壇が造り付けられ、弁財天が祀られています。仏壇の前には香炉と燭台と花立、それにお供え物が置かれています。土室は単なる煙突ではなく、修行の場にふさわしい施設となっています。この土室は平安時代に祈親上人というお坊さんが観音様のお告げによって考案したものと、高野山では古くから伝えられています。寒さの厳しい高野山で土室は不可欠の施設だったことでしょう。室町時代初期に描かれた「慕婦絵詞」という絵巻物には、京都大原にあるお寺を描いた場面に土室を彷彿とさせるものが描かれています。また

江戸時代後期に出版された「紀伊国名所図会」の高野山之部に「土室にて寒気を凌ぐところ」という図が載せられています。盛んに炎の上がる炉には釜が吊され、廻りでお坊さん達が食事をしたり何やら物書きをしている様子がかかれています。中世に広く普及した土室も、江戸時代にはすでに高野山でしか見られない物珍しい設備となっていたのでしょう。その「土室」が現在も金剛峯寺に残されているのです。しかもそれは年に一回だけが実際に暖炉として使われています。二月十四日の夜から十五日にかけて行われる常楽会(涅槃会ともいいます)の時です。高野山全山のお坊さんが大広間に集まって法要が行われる間、隣の土室の間では炉に火が入れられ、一般の信者さんはここで暖を取りながら参列するのです。機会があれば是非、常楽会に参列して土室の暖かさを体験して頂きたいと思います。

た京都の仁和寺や岩出市にある根来寺でも室町時代の建物に「つちむろ」という部屋があったことが記録で確認で

公益財団法人

高野山文化財保存会の文化財保護への取り組み

高野山文化財保存会では、霊宝館において絵本山金剛峯寺及びその塔頭寺院等の所有にかかる文化財の保存、収蔵、展示、調査など文化財全般の保護を館長以下職員八名、合計九名の体制で行っております。また、文化財保護の仕事は、館外でも行っております。本号では、その内容の一部をご紹介します。

高野山の文化財は、霊宝館の施設



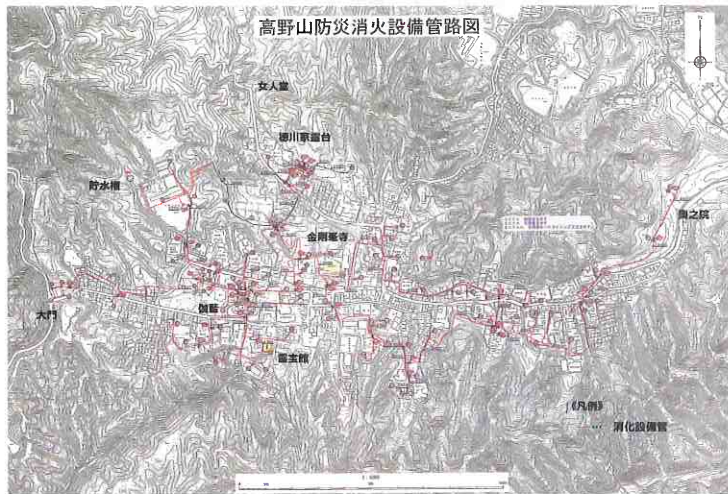
国宝金剛峯寺不動堂のドレンチャー作動風景



放水銃放水訓練



消火栓筒先取り扱い訓練



赤い線は、消火設備配管

内にある彫刻、工芸品、絵画、書跡などだけではなく、高野山全域に点在しています。例えば、建造物などは高野山の各所に存在しています。これらの文化財は屋外にあるため、自然環境の温湿度や経年変化などによる影響を受けやすく、また落雷などによる火災の危険性が伴います。建造物の修理、特に構造を支える木部の解体修理や半解体修理は、何

十年や百年に一度の頻度で行わなくてはなりません。また、高野山の建造物の屋根は、その殆どが伝統的に檜皮葺きで、およそ二十年から三十年で耐用年数となりますので定期的な葺き替えが必要となります。高野山文化財保存会では、これらの建物の保存修理事業、また、火災から文化財である建造物を守るための防災事業も行っています。

また、建造物には避雷針のほか、放水銃やドレンチャーなどの消火設備を設置しており、平素から設備の作動点検や職員による消火訓練も行っています。

では、これらの設備から放水される水は、どこから、どのようにして、もたらされるのか、皆さんご存じでしょうか。高野山の地下には、その水を運ぶために、縦横無尽に消火栓が配管されています。このことは高野山に住んでいる人にもあまり知られていません。

高野山文化財保存会では、毎日朝夕、貯水槽の水量点検をしています。

このような仕事は、大変地味で人目に触れることは殆どありませんが、高野山の文化財を守るためにはとても重要な仕事です。

ですが、高野山の文化財を保護していくために一番必要なのは、これらの施設だけではなく、高野山で生活する人や、参拝者や観光客の皆さんが、高野山の文化財を大切にしたいという、愛する気持ちを持つてもらうことです。

この気持ちが文化財を保護する上で最も大切なことであり、世界遺産である高野山、ひいては弘法大師空海が開いた高野山の宗教文化を次世代に守り伝えることに繋がっていくのです。

(T・S)

高野山霊宝館からのお知らせ

各種イベント報告

○重文徳川家霊台特別公開

(平成25年10月12日(土)～20日(日))

昨年度に続き、重文徳川家霊台の霊屋の特別公開を実施いたしました。



秋雨の続く寒い中、9日間で3240名の方々にお越しいただきました。普段は見ることでできない霊屋内部の荘厳に、多くの方々が見惚れていました。

○長谷川智弘作品展

結びの世界「みやび」を開催

(平成25年10月10日(木)～16日(水))

霊宝館「迎賓館」にて、作品展を開催いたしました。期間中、多くの来場者がありました。来場者は、長谷川師の解説を聞き、作品鑑賞を楽

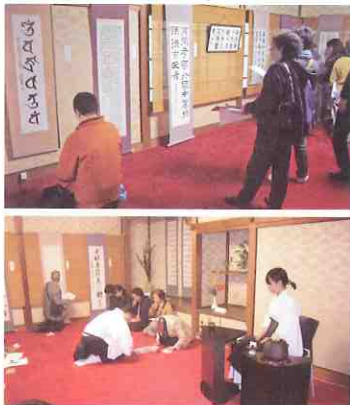


しまれ、結びの奥深さに感心されておられました。

○秋の茶会(高野山大学文化部合同 秋季展示・茶会)

(平成25年10月19日(土)・20日(日))

霊宝館「迎賓館」にて、高野山大学書道部員による書展、同大学華道部員による華展の展示を行いました。また、ご覧いただいた方を対象に、同大学茶道部員が抹茶のお接



待を行いました。部員達の熱心に活動する姿は、来館者には大変好評でした。

○インドの至宝サンギート・ミシュラ 来日奉納ツアー

(平成25年11月3日(日))



北インドの擦弦楽器によるインドの伝統音楽の奉納演奏を行いました。聴衆は悠久の旋律に耳を傾け、遠い国インドに思いを馳せておられました。

○次回春期企画展 「火災と高野山―よみがえるその歴史と暮らし」開催

(平成26年4月26日(土)～7月13日(日))

高野山は、弘仁七年(八一六)の開創以来、幾度となく火事に見舞われてきました。そのたびに空海の築いた霊山を守るべく、先人達の血の滲むよう



な労苦の復興の甲斐があり、今日の高野山の景観や文化財が守り伝えられています。

火災の歴史は、特に高野山で行われた発掘調査で出土した埋蔵文化財である遺構・遺物から窺え、これらは火災当時の山上の暮らしを如実に物語っています。

また、高野山に今日まで伝世してきた彫刻、絵画、工芸品、文書などの文化財は、奇跡的に火災を潜り抜けて守り伝えられたものばかりです。

これらの文化財を通じ、さらに後世に引き継ぐことの重要さを考える機会となれば幸いです。

「関西文化の日」事業に参加

(平成25年11月11日(月))

事業に継続参加し、無料拝観を行いましたところ、426名もの来館者があり、密教美術の鑑賞を楽しんでいただきました。

法薬尼の埋経



法薬尼経筒（左から漆塗り木製経筒の蓋、同身、銅製経筒、陶製経筒）

昭和三十九年（一九六四）十一月三

日、弘法大師御廟の北東約一六メートルの地点から、比丘尼法薬という女性によって納められた経筒（お経を納めた容器）が見つかりました。翌年の高野山開創一一五〇年を前に、御廟周辺の整備の一環として瑞籬内の植樹をしていた折に偶然発見されたのです。しかもその経筒は蓋の部分に天永四年（一一一三）の銘文が刻まれているほか、筒内には完全に近い状態の經典類が残されていました。このような遺跡を考古学では、経塚と呼んでいます。

経塚は一般に法華経を霊地や聖地に埋納し、お釈迦様入滅から五十六億七千万年後に弥勒様が下生された折、再びお経を開いて帰依したいという思いから造営されたと言われています。末法の世に入る平安時代中期から後期に流行し、藤原道長が寛弘四年（一〇〇七）に造営した金峰

公益財団法人元興寺文化財研究所

狭川 真一

山経塚は、特に著名なものです。

さて、奥之院で発見されたこの法薬尼の経筒は、嚴重な三重構造になっていました。まず法華経八巻と開結二経（無量義経、觀音普賢経各一卷）、般若心経・阿弥陀経一卷に加え、願主である法薬尼の供養目録一卷とその願文一卷を経帙でまとめ、それを外包紙に包み、漆塗りされた木製容器にきつちりと納め、さらに銅鑄製の専用容器に入れたうえで、最も外側を陶器で作った専用容器に入れて埋納されていました。しかも漆塗り容器の内底には金剛界・胎藏界の種子曼荼羅と法華種子曼荼羅が丁寧に折り畳まれて敷かれていたのです。さらにお経は紺色の紙に銀で線を引き、文字は金泥を用いて書かれており、それぞれに見返し絵が描かれるなど豪華で丁寧なものでした。

この経塚を造営した法薬尼という

人について、残念ながらその出自を示すような記録は残っていません。ただ、彼女の供養目録を見ると、多数の仏像や仏画を造立し、諸作法を行っていることがわかります。古記録によると平安時代に高野山へ納経したのは、天皇や貴族がほとんどですから、こうした手厚い行為を行え

た法薬尼は、皇室や貴族に出自を求められるような人物だったと想像できます。ところが、発見の二日後に調査された楯英雄さんの報告によると、「経筒の周囲には何らの構築物もなく、他に一切の遺物も認めることはできなかった」とあります。通常の

経塚は、経筒を納めるための石室を作ったり、上に石積みや盛り土、さらには塔を建てる例もあるなど、しっかりと保護するとともに、その位置を明確に表示しているのです。また、お経とともに鏡や小刀などを一緒に埋納していることが多く、それらの霊力によって弥勒様下生の日



法薬尼経塚出土法華経見返し



法薬尼経筒出土状況

まで、お経を護り抜くよう願っている訳です。

このように通常の経塚遺跡と比べてみると、お経の装丁の丁寧さやお経を納める経筒の嚴重さに対して、経筒を保護する地下構造や地上標識はきわめて簡素あるいは皆無だということに驚きます。私は当初、法薬尼が弘法大師に遠慮したのかと思っ
ていましたが、意外なその理由は法薬尼の願文に書かれていました。「大師、常に斯の経を護持し玉はんことを」と。なんと、弘法大師のお力でお護りくださいと願っていたのです。強固な構築物を作らずとも、弘法大師にお護りいただける。そう信じていた法薬尼の篤い信仰心が伝わってくると思いませんか。

【参考文献】

楯英雄 一九六七「高野山奥院天永四年在銘経筒の出土状況」『歴史考古』第一五号
 巽三郎ほか 一九七〇『高野山奥之院の地寶』和歌山県教育委員会、高野山文化財保存会

霊宝館の庭園

ヤブツバキ・椿・艶葉木・海石榴

元高野山高等学校長 亀岡 弘昭



日本書紀にも槌の用材として登場する幹



艶葉と花



枝葉と果実（種子を宿す）

ツバキ科・ツバキ属の樹木で、現在、わが国に自生する〇ツバキという和名・別名のつく樹種はヤブツバキ（ヤマツバキ）、ヤブツバキの変種とされているユキツバキ（オクツバキ）とヤクシマツバキ（リンゴツバキ）の三種です。

これらのうち、ヤブツバキを、または、ヤブツバキとユキツバキを、単にツバキと表記されることもあり

（つやばき）、葉が革質で厚いことによる厚葉木（あつばき）という説があります。

古い書物や歌集などでは都婆岐（吉）・都波木・津波幾、漢名の海石榴（かいじやくりゅう・かいせきりゅう）・山茶（さんちゃ・さんさ）などの字があてられていることもあります。

現在、日本では、椿の字を慣用しています。中国では椿はセンダン

科の落葉高木のチャンチン（香椿）のことだそうです。

室町時代には種や変種に人の手をつくわえた品種がつけられるようになり、江戸時代に入ると椿愛好者や研究者も増え、多くの品種を載せた図譜なども、つくられていると聞いています。

高野山の徳川家霊台に祀られている二代将軍・徳川秀忠公・寛永九年没（一六三二）は大の椿ファンであつ

たといいます。

高野山塊に自生するツバキは、ヤブツバキ（薮椿）です。山麓では一月中旬、山頂近くでは三月中旬頃から咲きはじめ、一花のいのちは、そう長くはないが、同株同枝でも次々と蕾みが花となります。

高野山開創千二百年記念大法会の前半期には、この樹の花も、お出迎えをすることでしょう。

ヤブツバキの自生分布は青森県以南・四国・九州・沖縄・台湾と広いのですが、ヤブツバキ林は伊豆諸島・紀伊半島南部・南四国・五島列島などに多く、種子を搾って精製される「椿油」は、東の「大島椿油」と西の「五島椿油」が特に有名です。

昨年の秋の台風のもたらした大雨土石流による大被害のあった大島では復興に苦労されている中、今年一月にも椿の花が咲いていると伝えられました。

五島列島は、お大師さま（空海）が乗られた遣唐使船が出帆した地のある、私たちには特に、ご縁の深い所です。長崎県・五島市の市役所にヤブツバキについて問い合わせたところ、種子を搾って得た椿油の新しい諸用途と搾りかすのリサイクル、幹枝材・葉・花の利用、この樹にかたし、という方言名のあることなどを、教えていただきました。